



Title	「あきらめ」の意味に関する一研究(2)-「あきらめ」概念の「切る」ものとしての意味-
Author(s)	稻月, 聰子
Citation	大阪大学教育学年報. 2003, 8, p. 235-246
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/9057">https://doi.org/10.18910/9057</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 「あきらめ」の意味に関する一研究(2)

### —「あきらめ」概念の「切る」ものとしての意味—

稻月聰子

#### 【要旨】

本研究では、質問紙調査および補足的インタビューにおいて、自身の身体的な病気を最も重大な「あきらめ」体験であると回答した方の結果をもとに、その語りからみられる「あきらめ」概念の「切る」ものとしての心理的意味について、辞書的定義である「明らめ」及び「諦め」との比較考察を行なった。「明らめ」については、体験の多くは悲しみや辛さと言った情緒的反応を伴うが、それは「あからめていくこと=知ること」のためであり、知った後は知る前には戻ることができないと言う悲劇性にも関連しているのではないかと考察した。また、「諦め」については、あくまでそれを目標としながらも「諦め」ないことが、「あきらめ」を心の中に抱えていく上で必要であることが示唆された。さらに、「あきらめ」体験を含め、臨床場面で「語り」を「物語」として捉える際に、それが「美しいだけの物語」となること、嘘や虚構に終わることの危険性を述べた。最後に「あきらめ」とは、「あきらめなくてはならない自分=見にくい(醜い)自分」を見ていくことでもあるということから、昔話のモチーフの一つである「見るなの禁止」との関連について今後の研究の方向性を探った。

#### 1. はじめに

「あきらめ」という言葉は、悲嘆研究において悲嘆のプロセスの1段階とされたり (Deeken 1984)、自己受容における重要な概念であるとされるなど (上田 1996)、様々な心理学的研究において、その重要性が指摘されているものである。また臨床心理学においても、日本語の臨床心理学的意味を考える「日本語臨床」においてもキーワードとして取り上げられており (北山 1996, 1997, 1999)、その重要性が論じられている言葉である。川上(1996)は、臨床場面を関係体験の場と考え、クライエントの語った言葉を重視した事例を通して「恥感覚の体験からあきらめ体験への移行」(1996, 168頁)というプロセスについて検討を行っている。クライエントが「その時その場」の感覚を言葉に出来るようになり、最終的には「つまらない自分」を認め、これに対しての恥やおびえを言語化するようになったこの事例を通して、川上は「諦める」ことの重要性を以下のように述べている。「こうして、日常の人間関係が必ずしもクライエントを脅かすものではなくなっていった中で、彼は『<恥>を捨てる』のではなく、『恥ずかしい自分を<諦める>』ようになっていた。自分というものを長い間かけて<明らか>にしていったクライエントがようやく<諦め>の境地に一步踏み入れることになったのである。」(178頁) この例からも分かるように、臨床事例の中で、「あきらめ」ることができることは、一つの到達点であるようにも言及されるものである。

筆者は「あきらめ」という言葉をキーワードに、その言葉に個々の体験からどのような意味が付与されていくのかを考えることを目的とした研究を行っていく中で (稻月 2001a, 2001b)、「あきらめ」体験にみられる「あきらめ」という概念には、臨床心理学的見地からみると「つなぐ」ものとしての意味と「切る」ものとしての意味があることに着目し、昨年の年報 (稻月 2002) では、インタビュー調査にみられた「あきらめ」体験の語りの中で、現在は過去の「あきらめ」体験がどのような形になって心の中にもかれているのかを検討した。その中では当時を振り返ると過去の「あきらめ」体験は、「あの時……していたらどうなっていたんだろう」という仮定法過去の形で現在の人生の中で「生きられなかった人生」の物語として抱えられ、現在の視点から再構成を何度もされながら、過去の体験と現在の自分を結んでいくことが見出され、これを「あきらめ」という概念における「つなぐ」ものとしてとりあげた。その中の「あきらめ」とは、到達点の一つの形として語られるものである一方、人生の中で何度もくり返し想起され、

また新たな意味付けをなされるといった、いつでも動きを含んでおり、現在は生きられていない人生という意味では死んだものでありながら、何度も新たな意味付けをされて、新たな命を得て生まれていくものもあるとして捉えることができた。

本稿では、昨年の「つなぐ」ものとしての「あきらめ」の心理的意味に続き、その両義性の一方である「切る」ものとしての心理的意味について、自由記述や補足的インタビュー調査でみられた語りをもとに検討することを目的とする。今回対象とするのは、調査の中で自身の病気を「あきらめ」体験としてあげられた5人の方の自由記述および補足的インタビューである。これは、臨床心理学的に「あきらめ」という概念をより詳細に検討していくための対象選択である。臨床場面でお会いする方は、何らかの悩みを抱えてその場へやってこられる。それは一般に「心の病」あるいは「心の傷」と呼ばれるようなものであることが多いが、身体と心は二元的に述べられるものではなく、摂食障害をはじめとする心身症などにおいて、その両方を心理臨床で考えていくことの必要性は周知のものとなっている。本稿における調査は一般の方を対象にしたものであり、心理療法の対象となるような精神科的疾患やそれに類するものは「あきらめ」体験においてあげられなかつたが、身体における病気においても、特にそれが慢性的疾患や完治が難しいものである場合、それを気持ちの上でどう整理をつけていくかは、臨床心理学的に検討する対象となるべきものであると思われた。その中で、「あきらめ」体験にみられる「あきらめ」の意味と、辞書的定義である「明らめ」および「諦め」の相違点の検討を行ない、その中で「あきらめ」概念における「切る」ものとしての心理的意味についての考察を行いたい。

## 2. 方法

本調査の概要については、最近他のところで述べたことがあるので、詳細はそちらにゆずり（稻月2002）、本稿では今回検討の対象とする方に関係することについてのみ報告する。

### (1) 調査対象者

23～87歳の男女（男性11名、女性55名）66名（平均年齢45.2歳）のうち、自身の病気を最も重大な「あきらめ」体験としてあげられた女性5名（平均年齢48.0歳）。自身の病気を最も重大な「あきらめ」体験としてあげられたのはこの5名のみであった。

### (2) 調査時期

2000年10月～11月。

### (3) 調査方法

友人・知人を介しての質問紙配布を経て、質問紙による調査をまず行った。その中で質問紙配布時に同時にインタビュー調査への協力を依頼し、了解を得た方を対象者として、質問紙の自由記述について詳しく伺う半構造面接とした。質問紙の補足が目的であったため、質問紙に書かれたことをもとにインタビューを行っている。対象とした方は趣味の教室の参加者、ホスピスの患者、老人ホームの入居者など多岐に渡っており、インタビューは筆者の自宅、対象者の自宅、病院などで、二人だけで話が出来る形をとて行われた。本稿で取り上げた方たちに関しての面接時間は平均30分程度であった。

### (4) 調査の内容

#### ①自分にとって重大な「あきらめ」体験の有無

#### ②体験の内容

「ない」と答えた方の場合は「あきらめ」についてのイメージやその人なりの定義をお聞きし「あきらめ」体験の内容における選択項目として設定したライフイベントをいかに体験したかを回答してもらった。

「ある」と答えた方の場合、質問紙に沿って、体験の頻度、もっとも重大だと思われる体験を順に3番目まで選んでいただいた。その後それぞれの体験について、体験の内容、時期を選択項目から回答していただき、体験の内容について詳しい話を伺った。

なお、体験の頻度は「一度」「たまに」「しばしば」「いつも」の4項目からの選択とし、体験内容の選

択項目としては「引越し」「老い」「死」「受験」「親」「恋愛」「病気」「就職」「結婚」「仕事」「子ども」「才能」「容姿」「進路」「友だち」「その他」の16項目を用意した。また、その中で「あきらめ」体験について、今振り返ってどう感じるかについても回答をお願いした。

③「あきらめ」という言葉をどういう意味だと考えるか

自由記述をもとに、思うところを自由に述べてもらった。

### 3. 結果

以下に、自身の病気を最も重大な「あきらめ」体験としてあげられた5人の方（全員女性）についての結果を、質問紙に記入されたことをもとに語られた内容を抜粋しながら具体例として示したい（年齢はインタビュー当時のものであり、<>内は調査者の言葉である。また、プライバシーに関する記述に関しては一部省略・変更を加えてある。また、病気に関しては自発的な発言の範囲に限り、調査者の方から詳細に尋ねることは行っていないため、BさんやDさんの病気の詳しい内容はわからない）。

#### (1) Aさん（44歳 女性）

①「あきらめ」体験の頻度：たまに

②「あきらめ」体験の内容

(a) 最も重大な「あきらめ」体験：本人の病気

突発性難聴ということが診断され、治療の結果これ以上には回復しないといわれたこと。

「最初は突然。その時は、学校と主婦と仕事の3つを抱えていた頃だったんだけど。そんな時に回復しないといわれて。これで仕事は出来ないと思った。でも、同じように病気を持っている先輩の話を聞いて、それがきっかけでやれるかも、と思った。最初は敏速な判断が出来ないかもしれないと思ったから。何年か前のことだけど、段々でも、それに慣れてきて、完全には出来ないけどそれはそれなりに出来るかもしれないと思うようになった。流れに乗っていると今になったという感じ。でも、正直学校のお金も無駄にするの勿体無かった（笑）。せっかくしんどい思いして3役やってきたのに。<今振り返って？>うーん、言葉では難しい。自分ではどうしようもなかったという感じかな。『起こった事』だからどうしようもない。辛い事だとは思うけど、でも、仕事は出来てるから。出来なかつたら違っただろうけど。」

(b) 2番目に重大な「あきらめ」体験：仕事

「（仕事の昇進）試験を初めて受けた時、自分は一生懸命した結果駄目だった。自分にとって今考えれば、そう大きなことではないかもしれない。私には合わんかな、とも思つたし。一生に一度のチャンスというわけでもなくして、また受けられるし。また、勉強して受けようかと思ってます。」

(c) 3番目に重大な「あきらめ」：子ども

「子どもはどうしてももう一人欲しかった。これも病気なんですけど、病気やから仕方ないけど、でも今でももう一人欲しいなという気持ちはある。」

③「あきらめ」の意味：しようがないと思う。

#### (2) Bさん（26歳 女性）

①「あきらめ」の頻度：たまに

②「あきらめ」の内容

(a) 最も重大な「あきらめ」の内容：自身の病気

「<何をあきらめた？>病気じゃなかった時のことです。病気がなかった時のこと。病気じゃなかったらもっと他の可能性もあったのにって。病気も、治ってしまえば良いんですけど、治ってしまわないから。あきらめないと仕方がないかな。<今振り返って？>自分一人のせいじゃない。でも、あんまり言うと親がかわいそうかな、と思う。まあ、言っても仕方がないかなとも思うし。自分には

辛いことだったけど、周りが見えるようになりました。そしたら、周りの辛さも分かってくる。自分だけではないんだな、と。そうすると、仕方がないかな、と。」

(b) 2番目に重大な「あきらめ」の内容：進路

「病気が一つの原因になって、進路を変更しました。それがなかったら、もっと広く選べたと思う。変更する前の進路をあきらめました。意地になって、無理に病気のせいにしてあきらめた。広い視野でその時見れたら違ったのかもしれないけど、その時は余裕がなかった。どこかに逃げたかったのかもしれないですね。あきらめたら自分が楽になった。」

(c) 3番目に重大な「あきらめ」の内容：仕事

「これは、前の二つと重みが違うんですけど、一応書いちやいました。雇用条件とか、そういうことなんんですけど。現実と理想の違いかな。対人関係もあるし。でも、今は流れに任せてという感じで。何となくあきらめてる感じです。」

③あきらめの意味

仕方がない・自分一人ではどうしようもないこと

(3) Cさん（50歳 女性）

①「あきらめ」体験の頻度：一度

②最も重大な「あきらめ」体験の内容：自身の病気

「子どものおたふく風邪が移って、数日の間に片耳の聴力がゼロになってしまいました。20年近く前の話です。18000人に1人なんだって。うつらないように、予防を考えすぐに近くの病院に行つたんですけど、おたふく風邪の予防注射はないといわれて。そこにはないと、言う意味やったんかもしれませんけど、それで予防しなかったんです。その後の処置も遅かったです。いろんな病院回って、私としては最善をつくしたつもりですけど。処置の仕様が無いと言われて。今でも、全然外見からは分からなくて。でも、近所の人から話しかけられた時とか、聞こえない側から話されるとよく分からなくて。でも、何度も聞き返すのもためらっちゃって。たまにとんちんかんな返答してるんです。そういうの、やっぱり辛いんですよね。慣れたんですけど。やっぱり今でも、何か少しずつでも聴力が戻ってくるのではないか、とか思ったり。でも、子どもじゃなくて良かったとも思う。交通事故にでも遭ったと思ってあきらめています。<今振り返ってみて？>自分自身がしっかりしてなかったと思います。自分を責めてしまう。処置が早かったらとも思う。今も、家族にすごく迷惑かけてるからやっぱり悪いなあ、と思う。」

③「あきらめ」の意味

「自分に言い聞かせる。それと、一步前進する。これが置かれた状況だからと思って開き直るというか、居直るというか。」

(4) Dさん（26歳 女性）

①「あきらめ」体験の頻度：一度

②最も重大な「あきらめ」体験の内容：本人の病気

「感染症の病気で、日常生活には支障が無いけど、子どもの頃からプールやその他いろんなことを制約されて、今後も出産時などに影響があると思います。でも仕方ないな、て程度。もう物心ついた時にはこの病気だったので。入院したり。治療の為にお灸に通ったり。何で自分だけこんなことするんだろう、と思ってました。でも、大人になって調べて、ああ、そういうことだったのか、と。何となく嫌がられるというか、差別と言うか、そういうのがあるのもこの病気のせいなんだ、と。<今振り返ってみて？>病気になったのは分別の無い頃なので、後でそういう知識を知った時、ショックでしたけど、選択の余地はなかった。自分の望んでる事ではないし、嫌ですけど。でも、努力してどうなるもんでもないし、直せるものではないですから。」

③「あきらめ」の意味

「日常で大なり小なりあることで特別ではない。変えられることは「あきらめ」じゃないと思う。」

どうにもならない事を受け入れる時、『あきらめ』る。変えられない事に使うような感じ、あります。選択する時も『あきらめ』る、『あきらめ』ないがあると思うけど。」

### (5) Eさん（68歳 女性）

①「あきらめ」体験の頻度：たまに

②「あきらめ」体験の内容

(a) 最も重大な「あきらめ」体験の内容：本人の病気

私の人生も終わりだと思った。

「ふざけていますが。<何をあきらめた?>命。生きる事、仕事、人との付き合い。私はガンの末期でして、もう終わつたなど。人生の全てが終わりだと思った。あきらめないと仕方ないと。元気な間に（死に関して）自分のことはしゃべってましたので。いよいよ来たかと。怒ることはないです。自分の病気だから怒りません。でも、悲しいです。後に入った方がどんどん亡くなつていかれます。だから、車椅子で食事を取れることとか、現在の中で幸せを感じています。健常者とは違いますから、いつかは遠からず訪れます。でも、気にしない。私はどれだけ生きるか記録を作りたい。自分の病気だから、専門家に任せて。このこと（ガン）は子どもだけが知っています。お見舞いに来てくれた方にも、あちこち痛い事とかは言うんですけど、一番恐ろしいガンの話はいたしません。家族が支えになります。別れるたびに、もう一度会えるかなと思いながらバイバイと言います。（病気は）誰に託すことも出来ないですから。悔いられん。仕方なくあきらめる。必ず誰しも来るもの。今、良かったと思うことは、子どもの愛を確かめることができます。娘がよっちょゅう来てくれるんです。こういうことが無かつたら、知らなかつたかもしれない。お母さんは満足していると。愛の存在を確かめられて、満足していると。」

(b) 2番目に重大な「あきらめ」：引越し

「田舎からこっちへ來たんですけど。ショックでした。大変広い庭がありまして、花もきれいにしていたんです。やむを得ずですが。植物がいっぱいあった。あんな花、こんな花、ありました。あの庭が。」

③「あきらめ」の意味

「私にとって『あきらめ』は、小さいものの連續です。幸せよりもあきらめの方が多い。それをみんな乗り越えていった。たくさん『あきらめ』はありますが、いつまでもくよくよしません。くよくよしないために『あきらめ』るんでしょう。前へ進んでいかない。人も恨まない。深く落ち込まない。人を憎むあきらめはありません。あきらめに暗いイメージを持つことはありません。明るく展開していくことだと思います。」

## 4. 考察

本章では、前章の5人の女性の自由記述および補足的インタビューをもとに、彼女たちの「あきらめ」体験にみられる、「あきらめ」概念における「切る」ものとしての意味を考えていきたい。「あきらめ」には、「明らめ」と「諦め」の二つの辞書的意味があるが、ここではこの「明らめ」および「諦め」の意味と、彼女たちの体験にみられる「あきらめ」の意味についての相違点を考え、その上で「切る」ものとしての意味を検討していくことを考える。

### (1) 「あきらめ」の辞書による定義

まず辞書的意味を確認しておくと、「あきらめ」とは、「あきらめる」の名詞形であるが、この「あきらめる」には「明らめる」と「諦める」の2つがある。まず大辞泉によると「明らめる」には「①事情や理由を明らかにする、はっきりさせる、②心を明るく楽しくする、気持ちを晴れやかにする」の意味がある（松村 1998）。次に、「諦める」には「あきらめること、断念すること」の意味があり、この定義は大辞林（松村 1999）、集英社国語辞典（森岡他 2000）など多くの辞典でほぼ同じように記され

ている。国語大辞典新装版（市古他 2000）では、「諦める」は、「明らめる」から転じた語で、「道理を明らかに断念する意」となっており、「仕がないと思いつくる、断念する」と記されている。大辞泉では「あきらめる」と「思いつくる」の用法の違いが紹介されているが、望むことがかなわないことが分かって望むのを止める意の場合は、「あきらめる」のみが用いられ、「思いつくる」は積極的に行なう、覚悟として行なう意があるとされている。

また、旺文社古語辞典（松村 1991）では「明きらむ」は「①明らかにする、理由や不審を究め知る、つまびらかにする②事実をはっきりさせる、事実を告げ知らす、弁明する③心の中を明るくする、晴れ晴れする」と、「諦む」は「明きらむ」より転じた語で「将来に対する見通しを明らかにしたことによってそれ以上固執することを断念する」意であることが記されている。

これらの辞書の定義を総括すると、「明らめ」は「明らかにする、はっきりさせる」という意味であり、「諦め」は「望むことがかなわないと分かって（明らかに）、望むのをやめる、断念する」という意味であると言えるだろう。では、「あきらめ」体験の語りのなかでは、そのような辞書による定義は、果たしてその体験の中に生きた意味として見出せるのかを、「明らめ」「諦め」それぞれについて検討していきたい。

## (2) 「明らめ」＝「あきらめ」なければならないことを知る（明らめる）こと

まず、5人の方が「あきらめ」た経験をどのように語っているのかをみてみることにしたい。Aさんは「起こった事だからどうしようもない」と語り、BさんとEさんは「あきらめないと仕がない」と語り、またCさんは「交通事故にでも遭ったと思ってあきらめます」と語った。さらに、Dさんは「努力してもどうなるもんでもないし、直せるものではないですから」と語っている。ここで彼女たちに共通しているのは、「あきらめなければならない」ことを知ってしまったということであり、そうするしか「仕がない」ことを知っているということである。Dさんは小さい頃から病気であったが、「あきらめ」たのは、自分の病気のことを調べ、その病気について「知った」20代であると語った。Aさんも病気が「これ以上には回復しないと言われた」時、それは「あきらめ」体験となった。さらにBさんの「治ってしまえば良いんですけど。治ってしまわないと」の語りには、治てしまわないと「知って」いるから「あきらめ」なければならないことが端的に示されている。

これらのことから分かるように、やはり「あきらめ」体験の契機は「事情や理由を明らかにすること」つまり「知ること」であるということが、それこそ明らかになるわけだが、体験の中から考えてみると、「知ること」が何故「あきらめ」となるのであろうか。それは知ってしまうと、私たちは二度と知らなかつたときには戻れないからではないかと筆者には思われる。柄谷は「言葉と悲劇（1999）」の中で、悲劇を悲劇たらしめているのは、くりかえすことのできない一回性であると述べており、また悲劇は出来事の悲惨さとは無関係であり、むしろ認識の問題であることについて言及しているが、「あきらめ」においてもDさんが「『あきらめ』とは変えられることに対して使うような感じ、あります」と述べるように、それが一回性であり、「あきらめ」なければならないことを認識することから出発することにおいて、それは悲劇的であるといえるだろう。もちろん、「あきらめ」体験にも様々なレベルがあり、すべてがすべて悲劇的というわけではない。Bさんが語るように同じ「あきらめ」体験でも、どれだけ自分にとって重大かという点において、「他と重みが違う」体験が悲劇的な「あきらめ」であるといえるだろう。

「あきらめ」概念について、過去の体験想起によるイメージ変化をSD法によって検討した結果、「あきらめ」体験想起後はイメージがポジティブな方向へ変化する一方、同時に「重い」「きびしい」「辛い」という方向へも変化していたことが見出されたが（稻月 2001a, 2001b）、これらもまた「知ること」がもう元へは戻れず、やり直しのきかない一回性のものであるという現実にもよっているように思われる。以前「あきらめ」体験の想起が痛みを伴うのは何故かを考えるにあたり、それは「死にきらない物語」であり、仮定法過去の形で現在も生き続けていることをその依拠としたが、ここでさらに「あきらめ」ること自体に、二度と元には戻らないということを「知る」ことの悲劇性があり、その悲劇性ゆえの痛みがあることが明らかになってくる。このように「あきらめ」においての情緒的反応は、辛く悲し

いという痛みを伴うものであるが、その痛みには多層的要因があることが推測される。今後も検討を続けていく必要のある点だが、ここではその悲劇性による痛みについて言及するにとどめ、次に「諦め」について考えていくこととする。

### (3) 「諦め」ないことは「望む」ことによって「あきらめ」ていられること

辞書的定義と「あきらめ」体験における「あきらめ」の意味を比較検討した結果、「明らめ」については、どちらも「あきらめなければならない」という道理を知る（明らめる）ことが「あきらめ」の契機となることが分かった。では「諦め=望むのをやめる」についてはどうであろうか。

「あきらめ」体験においては、Cさんが「やっぱり今でも、少しづつでも聴力が戻ってくるのではないか、と思ったり」と語ったり、Eさんが「どれだけ生きるのか記録を作りたい」と語るように、実際のところ、心境として「諦め」はなかなかやってこないようである。しかしその一方で、彼女たちは望むことによって、「あきらめ」ながらも生きていくことができるようにも思われる。本調査において取り上げた5人の女性の「あきらめ」体験に共通するのは、その病気が過去のものとして片付けられる病気やけがではなく、今もなお悩まされる日々の続く病気であることである。筆者は彼女たちに直接会い、お話を伺ったわけだが、Eさん以外の方はお話を伺うまで外見からは病気のことを知ることができなかつた。そのような外見的には他と変わらないことは、彼女たちが最も重大な「あきらめ」体験として自身の病気をあげる上での重要な要因なのかもしれない。完治という形で病気と別れることなく、何らかの社会的身体的ハンデを背負いながら、しかし外見は病気以前と変わらないまま、彼女たちは生活を送っている。しかし、外見が他の人々と変わらないからこそ、彼女たちは、例えばCさんの世間話のエピソードに見られるような、他の人々との些細なズレの中で、その違いを何度も意識することになる。そして、Cさんが「あきらめ」の意味を「自分に言い聞かせる」と言ったように、そのような違いを意識することによって、病気は「あきらめなければならない」ことであることを何度も確認させられているようである。そこでは「あきらめ」によって、他の人との連続性を切られ、また病気以前の自分との連続性も切られることなどが生じ、「切る」ことは一度ではなく、何度もくり返し行なわれることになる。しかしその一方で、「いつかは回復するかもしれない」という希望がつながっているからこそ、彼女たちは「あきらめ」を抱えていられるようにも思われる。北山（2000）は「あきらめ」について以下のように述べている。

問題は『あきらめる』か『あきらめない』かではなく、その両方、つまり、アルものはナクナルけれど、ナクナルとまたアル、という感覚である。アルとナイとを抱き合わせて体験するしかなく、だからふつうは、つまり特別な場合を除いて、『あきらめた』と言う人は『あきらめてはいない』し、『あきらめないと』と言う人も半分『あきらめている』のではないか。臨床では、この両方が体験できることを目指す。あきらめの悪い人が、『あきらめたけど、本当はまだあきらめていないんですよ』と言うとき、無理なく感じるのは『あきらめ半分』の安定感である。（142-143頁）

この指摘のように、「明らめ」ではいるが望むことはやめないと言う点で「諦め」ではないこと、しかしすでに「あきらめ」体験としてその体験を語れる距離を持っていること、が彼女たちの「あきらめ」体験からみられる「あきらめ」の形だと言える。

「きっぱりと」「さっぱりと」といった形容詞は、「あきらめる」の上によく用いられるものであるが、これは「あきらめ」の「切る」ものとしての心理的意味がはっきりと示されたものであると言えよう。人は「あきらめ」なければならないことを知ると、知る前には戻れない。そこで一度私たちは人生の上で連続性を断ち、その「あきらめ」について、新たにいかに整理をつけていくかの心的作業に取り組むこととなるのである。しかし、「切る」意味のみで「あきらめ」が成立するか否かについては、それがいかに重大な「あきらめ」であったのか、あるいは恋愛や進路など、新たなものが待ち受ける「あきらめ」の場合なのか、それともその喪失は二度と回復できない場合であるのか、などによって異なるものであろう。重大であればあるほど、あるいはその回復が困難なものであればあるほど、そこに同

時に「諦め」ず、望みを「つなぐ」という意味がなければ、「あきらめ」は成立しないのではないかと思われる。また、たとえ新たな対象によって回復可能である場合でも「きっぱりとあきらめる」ことなどはなかなか出来るものではなく、やはり理想の形として提示されているのではないかとさえ見ることができる。心理学的にいえば、下手をすればそれは、「否認」や「合理化」である可能性すらある。方向としては「明らめ」、「諦め」へと向かっていくものであるのは確かだが、到達点にのみ着目するのではなく、そのプロセスがしっかりとたどられているかどうかが、心理的には重要なのではないだろうか。そしてそのプロセスの中では、「諦め」ないことによって、「明らめ」たものへの思いは望みとしてつながれ、今まさに生きられているかどうかが、プロセスをしっかりと辿っているか否かの大きな判断材料となるのではないだろうか。

ただ、前提条件としてある意味しっかりと「切る」ことができているからこそ、それは「あきらめ」体験としてあげられているのだ、ということは留意すべき点である。そして、その「切る」痛みをきちんと引き受けなければ、「あきらめ」は生きられたことにはならないのである。きれいな「諦め」には、何らかの心的防衛にすぎない可能性や、それそのものが問題であることが危険性として考えられることを前にも少し触れたが、以下にこの問題を項を改めて考えたい。

#### (4) 「語り」が「騙り」にならないこと

5人の中でもEさんは、すでにガンの末期であることを「知って」いる状態にあり、客観的に考えると彼女は死の受容の過程にいるわけであるが、その中で彼女は死を受容しているかと言えば、病気のことは「専門家に任せて」「一番恐ろしいガンの話はいたしません」と言いながら、「別れるたびにもう一度会えるかなと思いながらバイバイと言います」と語っており、安らかな受容の過程ではなく、毎日が揺れの中にいるようであった。そして、彼女の「私はどれだけ生きるか記録を作りたい」という語りは、筆者に大きなインパクトを与えるものであり、非常にリアルなものであった。一般に死の受容には段階が設けられており、それをプロセスとして経ながら受容にいたるように考えられている(ロス 1971他)。もちろん死を受容し、生を終える方も多くおられるだろう。しかし、あまりにも受容を重視することは、「美しい物語」として表層のみを辿っているに過ぎない危険性をはらんでいる。これは「諦め」という境地がむしろ理想であるために、その辛さや痛みを感じることなく、「諦めてむしろ良かった」という安易な意味付けに終わってしまうとき、その道理は「明らめ」られたわけではなく、その痛みは生きられないことがあるのと同じである。そして、「美しいだけの物語」が虚構に過ぎないと言う危険性は心理療法の中でも言えることである。

河合(1998)は、心理療法では神経症的な物語に対して、それを見通していくと同時に新しい物語を見出すことが治療であることを述べる一方で、その物語が魂の生み出した現実であると同時に、ファンタジーとして虚構や嘘をも含んでいる問題点を指摘する。河合はその中で、新たな物語を探し、作ることが本当に治療的であるのかどうかの再考を促す。河合によれば、物語は自然科学的思考と異なるように見えて、実は因果的思考にはまって擬似自然科学になりやすいうこと、自我の満足になりやすいうことを示唆する。その上で物語の本質は変化し展開することではなく、繰り返されることにあることを提示し、反復されることによって生ずる微妙なずれや差異に注目すること、物語の構造を弁証法的に捉えなおすことの重要性を指摘する。

「あきらめ」体験に則して考えていけば、「あきらめ」の心理的意味を考えていく時、一般的な否定的概念への新たな意義の提示として、「あきらめることは良いことだ」「あきらめることによって前に進めるのだ」などといったポジティブな意義が提示されやすい。しかし、重要なのは「あきらめ」体験においてはくり返しきり返し「あきらめなければならぬこと」を知りながら、その一方で「あきらめたくない」という気持ちを抱いており、そのどうにもならない気持ちから、新たな動きがある日生まれていくことなのである。それは「あきらめることによって前に進める」というよりはむしろ「あきらめなければ前には進めない」と知りながら、それでも「あきらめ」たくない気持ちも同時に抱えていくことであり、この時因果的に考えること、安易に肯定的意味を添えることはむしろ「あきらめ」を「美しいだけの」物語として形骸化し、過去のものとして死なせてしまうことになりかねない。Eさんはガンの

末期であるという状況を「悲しいです」と語る一方で、生きる望みを捨てようとはしない。その「あきらめ」たくない気持ちは、死の受容ができていないと否定的に捉えられたり、美しい物語から外れる部分であるとタブー視されるべきではなく、その「あきらめ」きれない辛さをくり返し体験しなければならないところに私たちは着目すべきではないだろうか。奇しくもEさんは「『あきらめ』は小さなものの連続です」と語られたが、多くのインタビューに見られたように、一つの重大な「あきらめ」は小さな「あきらめ」を日常に引き起こし、そのつど「明らめ」、「諦め」ることを迫る。しかし「諦め」の境地に至るのはなかなか困難で「自分に言い聞かせながら」、「自分だけではないんだな」と思いながら、その時その時をやり過ごしていく中で、何らかの洞察やその「あきらめ」体験に個人の意味が付与されていくことが、多くの「あきらめ」体験なのではないかと思われる。村上春樹は謎はとくのではなく、それを潜り抜けることが大事であると述べているが<sup>1)</sup>、「あきらめ」体験においても、それは人生の上で何度も生じてくるものであり、容易にその意味を得ることはできないが、何らかの形でそれを潜り抜けることができた時、その意味は生じてくるのではないだろうか。このように、「あきらめ」体験の「切る」ことと「つなぐ」ことをくり返しながら、過去の体験から付与される「あきらめ」の意味は何度もその時の状況によって新たな意味を持ちつつ、しかし「明らめ」「諦め」の方向へと変化していくものであると捉えておくことが必要なのではないかと考える。

#### (5) 「みにくい自分」を生きること

本稿で対象としている方々は、何らかの選択肢のうちから一つを選んだというわけではなく、病気という、それしかない状況の中で「あきらめ」なければならなかった方たちであるが、興味深いのは、BさんやEさんが、何を「あきらめ」たのかという筆者の問い合わせに対し、「病気じゃなかった時のこと」「生きること」と答えていることである。これは「そうでありたい自分ではいられないこと」を「あきらめ」た結果、「あきらめ」の対象として「そうでありたい自分」をあげているということである。つまり、今の自分はある意味で「そうでありたくない自分」であり、「そうでありたい自分」の反対であることから「みにくい自分」であることが分かる。北山（1997）の指摘するように、「みにくい」とは「醜い」ことであり、「見にくく」ことである。筆者は「あきらめ」について考えていく上で、「見るなの禁止」というイメージを重視するようになったが、ここでは十分な考察には至らないものの、彼女たちの語りをもとに、「見るなの禁止」と「あきらめ」について考え、今後の方向性を探りたい。

「見るなの禁止」は日本の昔話のモチーフの一つとしてはあまりにも有名であり、多くの臨床心理学者においても言及されている。例えば、河合（1982）は「見るなの座敷」の話型に注目し、日本人論を展開している。そこでは、「見るなの禁止」が破られた後の展開が文化比較によって論じられ、西洋では幸福な結婚という結合の形で終わることが多いのに対し、日本では禁止を破られた女性が立ち去る形で物語が終わることに、西洋と日本における自我の違い、意識構造の違いについての論考を行なっている。また、北山（1997）は、母子関係の中でこの「見るなの禁止」を取り上げ、母親の「醜いもの」を見るなどを禁止するのが「見るなの禁止」であることを指摘し、早期の母子関係を重視した視点から、日本の昔話の構造を分析している。このように様々な観点から「見るなの禁止」は論じられているが、ここでは秋田（2001）と河合（1998、2001）の述べる「見るなの禁止」に関する論を取り上げ、彼女たちの「あきらめ」体験を考えてみたい。

秋田（2001）は、「見るなの禁止」を破ると言うことは、女性の禁止を破ること、ひいては魂の禁止を破ることであることに言及し、その結果もたらされた決定的な欠落感は回復されることはないが、この回復されることのない空虚を生き抜くことで、自らを成り立たせるのがDisfigured Heroであるとし、自論を展開している。そして「見るなの禁止」を「『鶴女房』において鶴は去っていき、『竹取物語』においてかぐや姫は月に帰る。残された者には決定的な欠落感と空虚感が残る。そしてその時こそ『罪を得る』ための、一生のうちそう度々はない可能性の時もあるのだ。そしてそれぞれの欠落、それぞれに異なる宿業に立ち向かおうとする時、その大きな苦しみのなかから個別性が開け始める（143頁）」として捉えている。ここで彼女たちの語りに戻ってみると、去っていったのは「そうでありたい自分」であり、残されたのは喪失を抱えた「醜い（見にくい）自分」であると言える。「みにくい自分」を生き

ることを余儀なくされることは、秋田の指摘するように、大きな苦しみを抱えることとであろう。しかし、それによって自分自身のことを考えたり、周囲との関係性に彼女たちはもう一度思いを馳せることができるようになっている。Eさんは「今良かったと思うことは、子どもの愛を確かめることができたこと」と語っているが、Eさんにとっても「見にくい自分」を生きる時、今までとは異なる視野が開け、もう一度自身を見つめ直すきっかけともなっているようである。

筆者のイメージでは、「見るなの禁止」を破るとは、「見にくい自分」と出会い、それを引き受けいくことであるように思われる。前述の通り、病気を得ただけでは、それは「あきらめ」とはならない。病気を得て、それと共に生きていかなければいけないことを「知った」時、つまり「明らめた」時、「見るなの禁止」は破られ「開かれる」のである。秋田（2001）は「開け」を可能性が展開し始める事であるとするが、「あきらめ」体験によって開かれた向こうにあるのは、心理療法と同様平坦な道ではない。「見るなの禁止」の向こうにいるのは病気を得た「見にくい」自分である。昔話では異類の女房は「見るなの禁止」を破られた後、その場を去っていくが、彼女たちにとっての「見にくい」ものである「病気を得た自分」は、去っていくのではなく、それとして生きることを強いてくる。去っていったものへの思いを馳せながらも、自身はそこで「見にくい」ものとして生きていくことが、「あきらめ」体験によって得られるものであるが、これをどう生きていくかは、そこからのプロセスによって大きく意味が異なってくるものだと思われる。

最後に、この「見るなの禁止」に関する今後の方向性を提示しておきたい。「あきらめ」体験における「見るなの禁止」においては、「あきらめ」た対象は受容あるいは統合という形で「あきらめ」た人の中にとどまるのではなく、去ってしまう。しかし、そのようにして去ることによって「あきらめ」たことは存在価値は心の中にとどまるようである。河合（2001）は「うぐいすの里」や「鶴女房」など、異界の世界の異性との結合に失敗する物語をあげ、その意味をイニシエーションの否定の重要性から述べている。これらの物語では「見るなの禁止」は破られ、異類の女性は去ってしまう。シャーマンのイニシエーションに、異界に住む自分の守護霊を獲得することが含まれているとすると、女性が立ち去ってしまうことは、イニシエーションの失敗と言うことになるかもしれない。しかし、この世にとどめられないからこそ、異類としての女性の存在価値は保持されるのであり、また禁を破ってのぞかなかつたならば、対象に対する愛やコミットは成立しない。河合は、結合しており、本当の関心が存在するからこそ主人公は禁を破るのであり、それによって異類の女房がいなくなるのは、単なる消滅ではなくて、のぞくことによって異類の女房を自分の本来の場所である異界に送り返してあげるのだと述べる。「あきらめ」においても、同様の意味が見出されるかどうかは、今後検討していくべき点であろう。また、シャーマンのイニシエーションにおいて、自分の身体は解体され、喪失されるわけであるが、そうすることによって、つまり自分を犠牲にささげ、自分の消滅を見るのが主体の成立なのであるとしたら、彼女たちの「あきらめ」体験も、また自身の「ありたかった姿」を犠牲にささげることによって主体を成立させていく一つのあり方であるということも考えられる。この点についても、紙数の都合や考察の不十分さがあるので、また機を改めて述べることとし、本稿ではその方向性を示すにとどめたい。

### 終わりに

本稿では「あきらめ」概念における心理的意味の研究の一つとして、昨年の「つなぐ」ものとしての意味に続き、「切る」ものとしての意味を、「明らめ」「諦め」それぞれの辞書的定義の意味と、インタビュー調査にみられる「あきらめ」体験の中で見出された意味との比較によって検討した。最近では、臨床場面において「あきらめ」の在り方も、人生のどの局面でのものかによっても少しずつ様相が異なるような印象を受けることが多い。今後は、より臨床場面に即した形で「あきらめ」の心理的意味を考えていければと考える。

## &lt;注&gt;

1) 村上春樹が、新潮社の「海辺のカフカ」HPの中で読者の感想に答え、述べているもの。

## &lt;参考文献&gt;

- 秋田巖 2001 「心理療法と人間」 河合隼雄総編集 『講座心理療法 第6巻 心理療法と人間関係』 岩波書店, 113-153.
- Bowlby, J. *Loss : sadness and depression* 1981 黒田実郎ほか訳 『母子関係の理論3 愛情喪失』 岩崎学術出版社
- Deeken, A. 1986 「悲嘆のプロセスー残された家族へのケア」 アルフォンス・デーケン編 『死への準備教育 第2巻 死を見取る』 メヂカルフレンド社, 255-274頁.
- 市古・金田一・見坊・阪倉・中村他編 1988 『国語大辞典新装版』 小学館
- 稻月聰子 2001a 「『あきらめ』の意味に関する臨床心理学的研究」 大阪大学大学院人間科学研究科修士論文 (未公刊)
- 稻月聰子 2001b 「『あきらめ』の意味に関する基礎的研究」 『日本心理臨床学会第20回大会論文集大会発表論文集』
- 稻月聰子 2002 「『あきらめ』の意味に関する一研究ー『あきらめ』体験の語りをもとにー」『大阪大学教育学年報』7, 219-230頁.
- 柄谷行人 1993 『言葉と悲劇』 講談社学術文庫
- 川上範夫 1996 「「関係体験」論による日本語臨床の試み」 北山修編集代表日本語臨床 I 『恥』 星和書店, 167-179頁.
- 河合隼雄 1982 『昔話と日本人の心』 岩波書店
- 河合俊雄 1998 『概念の心理療法 物語から弁証法へ』 日本評論社
- 河合俊雄 2001 「イニシエーションにおける没入と否定」 河合隼雄総編集『講座心理療法 第1巻 理療法とイニシエーション』 岩波書店, 19-61頁.
- 川島重成 1999 『ギリシア悲劇』 講談社学術文庫
- 北山修 1988 『悲劇の発生論』 増補版 金剛出版
- 北山修 1993 『見るなの禁止』 北山修著作集 日本語臨床の深層第1巻 岩崎学術出版社
- 北山修編集代表 1997 日本語臨床 II 『「自分」と「自分」がない』 星和書店
- 北山修 2001 『幻滅論』 みすず書房
- Kubler-Ross, E. *On death and dying*, 1971 川口正吉訳 『死ぬ瞬間』 読売新聞社
- 松村明・山口明穂・和田利政編 1991 『旺文社 古語辞典』 旺文社
- 松村明監修 1998 『大辞泉』 小学館
- 松村明編 1999 『大辞林 第二版 新装版』 三省堂
- 森岡・徳川・川端・中村他編 2000 『集英社国語辞典第二版』 集英社
- 相良亨 1984 『日本人の死生観』 ぺりかん社
- 相良亨 1994 『相良亨著作集4 死生観・国学』 ぺりかん社
- 上田琢哉 1996 「自己受容概念の再検討ー自己評価概念の低い人の“上手なあきらめ”としてー」『心理学研究』1, 327-332頁.

## A Study on “Akirame”

### : The meaning of “Akirame”, especially “separating”

INATSUKI Satoko

The purpose of this paper is to examine the meaning of “Akirame” especially as “separating”, based on the responses to the questionnaire and the interviews. In the interviews, the interviewees regard their own chronic disease as the most important “Akirame” experience in their lives. The author examines the difference between the definition provided in the dictionary and the definition given through their own experiences. The two have a common point. It is the tragic aspect that “Akirame” is to know that people can never be back to their past. In their ordinary life, again and again, they face to the situation that they have to do “Akirame” because of their disease, they know that their life is changed by their disease and they can never be back to the life without their disease. This is the meaning of “Akirame” as “separating”, that is, they separate from their continuity in their life or previous relation with others. And then, the remembrance of the “Akirame” experiences calls back their painful emotion. On the other hand, in the dictionary “Akirame” is defined as “resigning”, however, in their actual life they will not resign but live with hoping that they might recover from their chronic disease. And this hope allows them to live through with their disease.

Lastly, the author refers to the present tendency in “Akirame” stories. We tend to make the past “Akirame” stories beautiful or idealized, but it might cause the problem that we will see the surface of this story and we will not question its deeper level or not. The author concludes that we have to pay attention to the fact the “Akirame” stories is not past, but still alive in their life with some pain.